

医療機関における退院支援に關与するソーシャルワーク・プログラム策定の試み

- 患者・家族に対する働きかけに焦点化した調査分析 -

東海大学 小原 眞知子 (2601)

高山 恵理子 (上智大学・3271) 山口 麻衣 (ルーテル学院大学・5165)

キーワード：退院支援、プログラム策定、ミクロ・レベル

1. 研究目的

医療機関における退院支援業務は昨今の法改正などの影響を受けて効果性・効率性・経済性が問われる一方で、退院後の地域サービスを含めた退院支援のあり方が問われている。本研究では、わが国の医療機関における退院支援業務におけるソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究の一環として、ここでは事例レベルの効果モデルを提示し、実施・評価を行い退院支援に関する既存のプログラムの評価を行うことを目的とする。具体的には、医療機関で行われているソーシャルワークの退院支援業務内で行われているプログラムの振り返りを行い、ゴール及び目標の再評価、及び既存のプログラム全体を評価することとする。本報告では、特にミクロ・レベル（患者・家族）に関わる実践を焦点化したものとする。

2. 研究の視点および方法

本研究は既存のプログラムの評価を行うに当たり、実際の退院支援プログラムから項目を抽出することを目的として、質的手法による調査を実施した。調査協力者は5年以上の経験を持つソーシャルワーカーであり、実践していることを言語化できる者に依頼した。調査の方法は、事前の説明会を開催し、協議の病院の特徴を反映させた退院支援のトピックを決定した。その後、事前配布した資料をソーシャルワークの評価枠組みに基づいて作成された。その資料に基づき、ソーシャルワーク評価を目的としたフォーカスグループインタビューを開催した。すべてのセッションは録音し、テープおこしを行い逐語記録化し、質的データ分析法を用いた。コーディングにはMAXQDA10を使用した。

3. 倫理的配慮

本研究は、本学会の研究倫理指針に基づいている。本調査については、東海大学の倫理委員会より承認を受けた。尚、調査にあたり書面にて説明し、全調査協力者及び機関責任者より書面による承諾を得ている。

4. 研究結果

4-1. 患者・家族に対する退院支援プログラムの特徴から捉えられる評価項目

患者に対する退院支援プログラムの特徴から、「ソーシャルワーク理念の活用」、「患者・家

族への信頼関係構築」、「患者・家族の的確なニーズ把握」、「人と環境への積極的介入」の4項目があげられた。これらを構成している下位項目は援助プロセスの連動性からも推察できる通り、複雑に影響し合っている。「疾患の特性把握と生活問題への連動」、「自らの医療機関の査定と有効活用」、「患者の心理的側面への査定と対応」、「エンパワメント視点の反映」、「平等な人権思想」、「必要に応じた権利擁護、代弁機能の活用」、「退院支援のための積極的社会資源の活用」、「院内外における『つなぎ』の役割」、「ソーシャルワークの専門的価値・信念を支援に生かす」、「社会福祉に関する制度の活用と問題解決への促進」、「患者にとって病院内での安心した窓口の役割」などがあげられた。家族に対する退院支援プログラムの特徴として、「家族回復力の視点」の下位項目には「患者を支える動機づけを促進」、「家族役割の変化に伴う危機状況を支える」、「代行・代弁を行う」、「家族が問題解決に取り組めるように動機づけ」があげられた。「家族の個別的理解と支援の提供」の下位項目には「患者の病状理解を促す働きかけ」、「場の提供」、「家族の大変さを常に理解」、「家族も相談できる場所として存在」、「家族の関係性を読み取って対応」、「ネガティブな気持ちを共有」、「人と人、人や関係機関や資源をつなぐ」などがある。「患者の権利と家族の位置づけの理解」の下位項目には、「家族の意向を治療に反映」、「家族の自己決定を尊重」、「ソーシャルワーク倫理に照らし合わせる」などがあげられた。

4-2 患者・家族に対する退院支援プログラムの必要性と開発

退院支援プログラムとして「退院支援マニュアル作成と普及プログラム」、「アセスメント指標作成と活用プログラム」、「全ケースに対するインテークワークプログラム」、「早期介入プログラム」、「グループワークを取り入れた支援プログラム」の必要性が示唆された。

5. 考察

医療機関のソーシャルワーカーは「退院」という事象そのものに特化するのではなく、常に総合的に患者や家族を捉え、援助を行っていることが大きな特徴である。加えて、退院を阻害する要素を常に考えながら援助を展開している。すなわち退院支援だけではなく、退院支援をする中で退院を阻害している因子を含めて解決へと導く支援を行っている。加えて、がん、HIV、透析患者、神経難病、身体障害など、それぞれの疾患の特徴から捉えられる生活課題を予測し、それぞれの個別ニーズに沿った患者・家族支援を行っている。また、人権擁護、プライバシー保護など、ソーシャルワークの倫理的側面を考慮しているところも特徴の一つとして捉えられる。このようなソーシャルワーク援助は、患者・家族からなかなか評価されにくいのが現状であるが、援助展開の初期段階から、患者・家族をプロセスへの参加の促進や成果を患者・家族と評価するシステム作りが必要になると考える。

本研究は6事例であるため、妥当性には限界がある。今後の課題として量的手法の調査を実施する必要があると考える。本報告は、「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」(研究代表者：大阪市立大学教授 白澤政和)の成果の一部である。